
銀婆沙! ~銀の侍と蒼紅と戦国武将~

坂田金時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀婆沙一～銀の侍と蒼紅と戦国武将～

【Zコード】

Z4286Y

【作者名】

坂田金時

【あらすじ】

ある日、銀さん達の目の前に現れた別世界の戦国武将達。彼らの内3人は銀さん達の知り合いにそつくり！？銀さん達は武将達を数人あずけるために護影屋と言つ隠れ店に行こうとするがその途中…

銀さんと護影屋、その仲間達、そして戦国武将達のドタバタギャグ「メ代イここ」に開幕！

基本設定

なんでも屋
護影屋 燐灯

『メンバー』
空蒼天音

護影屋のリーダー。
武器は木刀でかつて攘夷戦争で敵味方から『青鬼』と呼ばれ恐れられていた。

紅輝と2人で『双鬼』と呼ばれる。むちやくちや強い。

B A S A R A 世界の伊達政宗と同じ魂を持つ異世界の同一人物で顔や性格はそつくり。

ただし甘味が大好き。自分に言い寄ってくるからか遊女などの女は嫌悪している（月詠などは論外）

獅童紅輝

天音の幼馴染。

武器は棍棒でかつて攘夷戦争で敵味方から『紅鬼』と呼ばれ恐れられていた。

天音と2人で『双鬼』と呼ばれる。むちやくちや強い。

B A S A R A 世界の真田幸村と同じ魂を持つ異世界の同一人物で顔や性格はそつくり。

天音や銀時とは甘味仲間。

鬼道翔
きどうかける

護影屋のオカソン的存在（爆笑）。

武器は折りたたみ式巨大両手裏剣で元フリーの凄腕の忍び。攘夷戦争で天音達と出会った。

元々はフリーの忍びだったが今は引退して護影屋専属の忍び。むちやくちや強い。

BASA世界の猿飛佐助と同じ魂を持つ意世界の同一人物で顔や性格はそっくり。

新ハヤ土方とは苦労人コンビを（無意識に）結成している。

『こえいや 護影屋 りんとう 燐灯とは？』

その名のとおり報酬をもらいフリーの護衛をする店。

普段は万事屋と対になってなんでも屋をしている隠れ店。ある口言葉を言つことで護影屋として依頼を受ける。

基本設定（後書き）

今回は設定、次回から本編です。

第一幕 普通に考えてトリップの仕方は大抵帰ってきたら家にいたといつて

ある日、万事屋ファミリーはリビングに落ちて来た青赤茶迷彩黄紫
縁黒の服を来た人間を見て顔を引きつらせていた。

「ねえ、こにはどい？ 言つてくれると俺様嬉しいな～」

迷彩の男がクナイを持ちながら言つ。

万事屋のオーナー、坂田銀時は頭を搔きながら言つた。

「ああ？ 人の家の天井突き破つて降つて来て置いてそりやねえだろ
？ つーか何でお宅の声、高杉と似てんの？ 銀さん鳥肌たつからやめ
てくれんない？」

「人の家壊しといて謝らないなんて最低ネ！」

万事屋の1人、神楽がそう言つた。

「それはすまなかつた！ 某は真田幸村と申す！」

「え？ 真田幸村つて、攘夷戦争のとき戦死して今はこの世にいない
はずじゃ…」

ダメガネ
新八がそつ言ひ。

「『ラアアアアアアアアーダメガネつてビツツ意味だあああああ
あああああーーー』

「ナレーションにツツコんでも無駄ネ。」

「本当のことだしな。」

「テメエラ殴られたいのか！？』

新八が握りこぶしをつくる。

「HEY！小十郎、ここはどこだ？」

青い人が茶色の人声をかける。

「政宗様、もう少しお待ちを。」

小十郎と呼ばれた茶色の人はそう言い銀時にガン飛ばして來た。

(何々？)の人俺にガン飛ばして來てるよ！？俺何かした！？)

「あのさ、俺達ここがどこか聞きたいんだけど？」

黄色の人声がそう言った。

「IJIは江戸ですよ？」

新八がそう言った。

「江戸？奥州じゃねえのか？」

青い人が聞いてきた。

「奥州？？ずいぶん古い言い方するな兄さん。奥州つつたら天人あまんと

の侵略で別の名前に変わったじゃねえか。今は青森県つて場所だぜ
？」

「なにー?」

銀時の言葉に考へ込む政宗。
そして顔を上げてこう言つた。

「小十郎、真田。もしかしたら口口は俺達のいたWorldは
えかもしない。」

「と、申しますと?」

「つまり、Jijiは俺達のいたWorldとは別のWorldってこ
とだ。」

「わ、わーる……?」

「世界つてことだ。おい銀髪、この世界について教えてくれないか
?」

銀時は少し考へると一連の会話から彼らが異世界人だと言つている
ということが分かった。

「わあつた。その前に自己紹介だ。俺あ坂田銀時。」

「僕は志村新ハダメガネです。ってダメガネって表記止めりまあまあまあおおおお
おー！」

「私は神楽ネ。Jijiちは定春ー!」

「俺は奥州筆頭、伊達政宗だ。」

「政宗様の右目、片倉小十郎だ。」

「俺様は「某の部下の猿飛佐助でござる!」曰那…」

「俺は風来坊、前田慶次つてね!」

「俺は西海の鬼、長曾我部元親だ!」

「毛利元就。日輪の申し子よ。」

「……」

「「」JUJU ちは風魔小太郎だよ!」

それぞれが自己紹介を終える。

「新八、要点かいつまんて手早く詳しく説明してくれ。」

「結局面倒なことは僕がやるんですね…。ええっと、ゴホン!…この世界は20年前に天人と呼ばれる異星人が襲来してきたんです。で、その天人を追い出そうと十数年にわたり攘夷戦争があつたんですけど、結局は幕府というお偉いさんがその天人のあまりの強さに弱腰になってしまい開国を許してしまうという事態で敗北。それからこの世界の文明は天人の技術が持ち込まれ豊かになりました。しかし一方で侍は廃刀令と言つのを出されて武士の魂である刀を取り上げられ衰退して行つてるんです。」

「何と…?」

「武士の魂である刀を取り上げるなんぞ、許せねえ…」

幸村と小十郎が声を上げ、他のメンバーも驚いている。

「つまり、この世界で我らが武器を持っていたら怪しまれるな。」

元就是はやつ言ひ。

「ん？ ああ…」

神楽が声を上げた。

「やつだつたアル！ やつこいつとだつたアルか！」

神楽が嬉しそうに政宗と幸村、佐助を見て言ひ。

「どうしたの神楽ちゃん？」

「やつさからずつと政宗と幸村と佐助が誰かに似てると思つてた阿尔。誰だかやつとわかつたネ！」

「ああ、やつ言えば…」

「なるほど、たしかに…」

神楽の言葉に銀時と新八は思いついたよつて言ひ。

「俺様達が誰に似てるって？」

「天音達ネ！政宗が天音で幸村が紅輝で佐助が翔にそつくりネ！」

「てかもう瓜一つじやね？」

「本当、鏡を見てるみたいですよ！」

3人をマジマジと見つめる銀時達。

「天音？ いつたい誰だよ？」

元親が不思議そうに聞く。

「僕ら、万事屋っていう所謂何でも屋をやってるんですけど、天音さん達も僕らと対になる感じで何でも屋をやってるんです。しかも裏では護影屋って言う雇い兵みたいなこともやってる人達なんです。」

「

「むちやくちや強くて普通の天人なんか目じゃないくらいアル！」

「昔はさつき言ってた攘夷戦争にも参加して天音と紅輝は二人合わせて双鬼とか呼ばれてたな。」

銀時達の絶贊ぶりに政宗、幸村が思つたこと。それは「戦いたい」だった。

「お前ら……行くところないんだつたら「ここに住めば良いアル！」

「え？ でも、この人数を世話するのはさすがに骨が折れるんじゃない？」

佐助の言葉で銀時達は考える。

「 「 「あー」 」 」

「さつき言つてた天音達のところに住ませるつてのはどうだ?」

「それアル!」

「でも、迷惑にならないかな?」

「ならあ、こっちに半分住んであっちに残りの半分が住めばいいんじゃねえか?」

銀時の提案で新ハはすぐにクジを作った。

「あの、皆さん。このクジを引いてください。これで赤い色が付いた人達は天音さんたちのところに住んでもらうといふことで。」

全員が黙つてクジを引いた。

そして結果が…

万事屋

・風魔小太郎

・毛利元就

・長曾我部元親

・前田慶次

何でも屋 燐灯

・伊達真田主従

「よし、決まったことだし。行くか！何でも屋燐灯へ！」

「でも、こきなり行つて相手は大丈夫なのか？」

小十郎の言葉に銀時は問題なしと言つ。

「あいつら、俺の頼みは結構聞いてくれるからな。」

桂などの頼みは聞かない。
銀時だから聞くのだ。

そして彼らは銀時達が借りてきた着流しなどを着用し（鎧などは後で郵便で送る）燐灯へと向かつた。

そしてその途中…

「どいたどいたどいたああああああああああああ…」

長屋の屋根から何者かが銀時達の前に飛び降りてきた。

「よつとー。」

それは医療用眼帯を着け紫の長い袋を背負つた政宗似の青年、天音
だった。

「天音さんー?」

「まさかこんなところで会うなんてな…」

天音は着地の体制から立ち上がり言葉を発する。

「おー、こいつが…」

「銀じやねえか、ビーした?」

「今からお前のところに行こうとしてたんだよ。頼みがあつてさあ。

」

「頼み?お前から頼み事なんて雨でも振るのか…?」

「じついう意味だ」「ラアー。」

「jokeだjoke。んなマジになんなよ銀。いや、槍でも降る
かもな(ボソリ)

「今思いつきりバカにしたよな?バカにしたと言えー。」

天音の胸ぐらを掴みかかる銀時。

- おひぐり -

一
ぬわ!
」

天音が避け銀時は前のめりになる。

天音は銀時の肩を使い倒立して向こう側へと行き走り出した。

一
待ちやがれええええええええええ！！

ヤケサのような男達が天音の後を追っていく。

なるほど、天音はヤケサ遅治「アルか？」

「極道位の相手ならいくらいようとアイツの敵じやねえな。ほつと
いて大丈夫だ。」

武将達を安心させるように銀時と神楽が囁く。

後ろからヤクザ達の悲鳴が聞こえ思わず振り返るとヤクザが数人空手で舞つて来る。

中に舞つていた。

「派手に暴れてますね天音さん…」

「ヤクザ達はお氣の毒アル。」

「普通のケガで済むことを祈つてやう。って、あれは…」

銀時は何かに気づいたように長屋の上を見る。

「そうでござったか。それ故に主人のもとを抜け出したのでござる
か…しかし、主人は貴殿のことを大切に思う故に…わかつてくださ
つたか！では、某からも主人に注意しておきまする！」

長屋の上から赤い着物を着た幸村似の青年…紅輝が飛び降りてきた。
猫を抱えて…

「む？ 銀時殿！」

猫を両手で抱きかかえながらタタタッと走つてくる紅輝。

「よお、紅輝。」

「！」の方が…！」

「どうしたアルか紅輝？」

「逃げ出した猫を捕まえていたところでござるの…実は！」の猫、かく
かくしかじかの理由があつて…」

「すごいですね、猫の言葉がわかるなんて…」

「ぬ? やがりの方々は…」

紅輝は武将達に気づく。

「ああ、実はな…」

銀時は事のあらましを話す。

「なるほど、某は獅童紅輝でござる。よろしくお頼み申す。」

「やああ、ここに住ましていいのか?」

「?.某は特に問題はないでござるが…翔が何と言つか…いや、天音殿の頼みなら問題はないか…こいどござるよ。」

「サンキューアル紅輝!」

「もう帰るのでよければ共に行きましょ!」

「道順同じだしな。」

そして銀時達と紅輝達は歩いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4286y/>

銀婆沙!～銀の侍と蒼紅と戦国武将～

2011年11月17日21時38分発行